
Days - 気まぐれな通り雨

透野サツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Days - 気まぐれな通り雨

【Nコード】

N7193E

【作者名】

透野サツキ

【あらすじ】

突然降り出した雨が思いがけない再会を連れてきた。

出かける前から空に灰色の雲が広がっていて、何となく来そうだなと思っていたけど、電車に乗っている間にやっぱり降り出した。

窓ガラスを叩く雨粒の勢いが結構強くて、目を見張る。

傘を持ってきたのは正解だったけど、駅から家までは自転車だから、運転がキツイ。帰りまでには止んでくれればいいんだけど。でもこればかりは、自分の力じゃどうしようもないなあ、なんて。

そんな事を考えているうちに、電車は駅に着いて、ドアが開いた。降りる瞬間の、ホームの屋根と電車のわずかな隙間から降ってくる雨が、夏服のブラウスを強く濡らす。

日曜日の昼。学校の最寄り駅だけど、制服で歩いてる人の姿はさすがに見かけない。

けれど、改札を抜けて出口に向かう階段の下に、一人だけ、男子高校生発見。

隣の北高の水色のシャツで、肩にスポーツバックを掛けて。いかにも傘を忘れて途方に暮れた感じで、1人でぼんやりと雨の粒が落ちてくるのを眺めている。背が高くて、染めてない短い髪に健康的な肌の色で、見るからに運動部っぽい。

横目で観察しつつ、無言で傘を広げて通り過ぎようとした瞬間、あたしは息を飲んだ。

見覚えのある顔立ち。

あんなに背が高かったかな、と思うけれど、横顔がすごく、記憶の中のそれと近くて。

だけど、偶然にしては出来過ぎっていうか。

確信が持てないまま、声を掛けるべきかどうかためらっていると、その北高生、座り込んで、靴ひもをきつく結び直したかと思ったら、次の瞬間、雨の中へと走り出した。

信じられない——北高まで、何分かかると思ってたの？

「——森屋さんッ！」

「え、あ、わつと」

とっさに呼び止めた声は思いがけず大きく響いて。突然の制止の
声に驚いた彼は、雨にぬれたコンクリートの上で足を滑らせそうに
なる。何とか転ばずに持ちこたえようと、振り返って、ちよつと驚い
た顔のまま、真っ直ぐこつちを見る。

ああ、そんなところに立ったままじゃ、ますます濡れるのに。
とか。

誰こいつ、と思われてたらどうしよう、とか。
いろんな考えが頭の中を駆け巡って、何も言葉が出てこない。
気まずい沈黙。

森屋孝史先輩は同じ中学のバスケット部の部長で目立ってたから、彼
を知ってる人はたくさんいたけど、あたしは委員会でちよつと一緒
だっただけの、勉強以外に特に取り得のない平凡な女子生徒だった
から、もはや彼の記憶の片隅にも残ってないかもしれない。
けど。

もしかしたらって、思う。

覚えて、くれていますか。

「あの、」

「和奏ちゃん？」

え。

「うわ、懐かしい、っていうかその制服、桜ヶ丘なんだ。知らなか
った。灯台下暗しってヤツ？」

森屋さんはあたしの名前を呼ぶと、興奮気味に水の跳ねる音を立
てながら、屋根のある位置まで戻ってくる。

「お久し振りです・・・よく分かりましたね」

気を取り直してあたしが言ったら、彼は何を勘違いしたのか、

「え、だって桜ヶ丘って隣じゃん？」

と、的外れな答えが返ってきて、何だか力が抜けてしまう。

「いや、制服の事じゃなくて」

「あ、何か俺間違えた？ ていうかそうか、メガネやめたんだ？
それで一瞬、あれっと思ったんだよね。でもオレの事『森屋さん』
って呼ぶの和奏ちゃんくらいだから。大体みんな、森屋とか森屋く
んとか、森屋先輩とか、部長とか、その人、とか」

「・・・そうでしたっけ」

言われるまで忘れてたけど、確かにあたしは中学の頃はメガネを
かけていて、今はコンタクトに変えたから、見た目の印象も少し変
わってるのかもしれない。自分ではさほど感じないけど。

「うん。それで条件反射で振り向いてた」

と言つて、森屋さんは明るく笑った。

あたしと森屋さんが同じ図書委員だったのは、あたしが中二の一
学期。

図書委員は各クラス一名ずつ選ばれて、主に昼休みや放課後、図
書室で生徒の本の貸し出しの受付をするのが仕事だったんだけど、
貴重な休み時間や放課後が潰れると言うので、みんな委員を嫌がっ
た。

あたしは元々、人より本を読む方で休み時間は図書室に居る事が
多かったから、そのついでみたいに自発的に図書委員になったんだ
けど、最初の委員会の集まりの時、遅刻気味にやってきて隣の席に
座った森屋さんは、ただ単にジャンケンで負けたのだと言っていた。
図書委員は3、4人ずつの班に分けられて、担当の曜日を決めら
れ、あとは自分たちの曜日を班のメンバーで上手くローテーション
を組むように言われた。

たまたま同じ班になった森屋さんは、あたしの胸のネームプレー
トに興味深そうに見て、

「下の名前なんて読むの？」

「・・・わかな、ですけど」

平和の和に奏でると書いて、わかな。時々めずらしいって言われ
る。変わってますか？ とあたしが聞いたら、

「うん。カツコイイね」

と答えた。

お世辞のつもりなんだったら、そこはいい名前だとか可愛いとかって言った方がわかりやすいのに、ヘンな人だなとあたしは思った。貸し出し当番を決める話になると、部活が忙しい森屋さんは、昼休みなら来られるけど放課後は勘弁して欲しいと言って、もう1人同じ班になった一年生の女の子は、ハッキリとは言わなかったけど積極的には参加したくなさそうだった。

あたしは話し合うのが面倒で、昼も放課後も自分がやるから大丈夫、何かどうしても都合が悪い時は頼みに行くからお願いします、とだけ言った。

けれど森屋さんは、昼休みの当番にはほぼ毎回顔を出し、仕事を手伝おうとしてカウンターに座るのはいいけど、貸し出しカードの仕組みを何度説明しても飲み込めずに、本を借りに来た生徒を困らせた。あたしが見かねて受付の仕事を引き受けると、代わりに室内をまわって本の整頓をしたり、備品を片付けたり、掲示物を貼りかえたりしていた。

それが落ち着いて手持ち無沙汰になると、森屋さんはやたらとあたしに話しかけてきた。基本的に図書室は私語厳禁で、むしろ他の生徒を注意しないといけない立場だったから、あたしがそれを注意すると、先輩は1人で窓側の席に移って「ブラックジャック」や「火の鳥」を読んでいた。

気を悪くしたかなと思って心配になったりもしたけど、次の週になると何事もなかった様にまた図書室に顔を見せては、同じ様な事を繰り返していた。何だかよく分からない人だなと思った。

「頑張れば行けそうかなあと思ったんだけどな」

あたしが、こんな土砂降りの中を走るなんて信じられない、とあきれて言ったら先輩は、たぶん部活用に持ってたスポーツタオルで

髪をがしと拭きながら、のん気に答えた。

近くに立ってみると、やっぱりあの頃より背が伸びてる感じがする。

声とか話し方とか、同じ人なのに、変な感じ。

「行けなくはないでしょうけど、風邪引きますよ普通」

「ん、でも割と丈夫な方だし、部室に替えのジャージあるし」

「帰りはどうするつもりなんですか」

あたしが立て続けに質問すると、先輩はうーんと低い声でしばらく唸って。

「ま、でもその頃には止むかもしれないし、まだ降ってたら部のヤツの傘に入れてもらうとか、その時はその時」

森屋さんはあっさり言うけど、それってつまり、何も考えてなかったって事なんじゃ。

あたしはため息を吐きながら、手に持っている透明なビニール傘の他にもう1つ、シヨルダーバッグの中から折りたたみの傘を探して、はい、と彼に差し出した。

「へ、何？」

「仕方ないから、貸してあげます」

ちよっと明るいブルーの無地の傘。男子が差ししても違和感はないはず。

「ウソ、いいの？ ていうか何で二本も持ってるの？」

先輩は驚いて、それからあたしの差し出した折りたたみの傘と、もう片方の手にあるビニール傘を交互に見て、もっともな疑問を口にする。

「折りたたみの傘は毎日持ってるんですけど、小さいし、差すのに手間かかるから、降りそうな日とか降ってる時はなるべく普通の傘で来ます」

「ふうん」

「・・・何かヘンですか？」

そりゃ確かに、どうせビニール傘を持ってくるんなら折りたたみ

の方は置いてきた方が、荷物にならないから、そこを突っ込まれると弱いけど。

「や、準備いいなと思って。しっかりしてるよね」

「というか、むしろアクシデントに弱いから。お守りみたいなものです」

あたしが淡々と言うと森屋さんは目を丸くして、

「そう？ あんまり見えないけどな」

「派手に取り乱す方でもないですけど、基本的に人を頼ったりするのが苦手だし、機転が利くわけでもないし。常に何かを心配してるから、勝手に空回りして、くたびれる時もあるし」

「あー、まあ用心深そうだね。旅行の時なんか、妙にでっかい荷物になっちゃったりするタイプ？」

図星だった。自分の性格の長所でも短所でもあるところ。どちらかと言うと、好きじゃない。

「だから、森谷さんみたいな人の事は、時々うらやましいですよ」

「何で？ アタマ空っぽだから？」

「一応、褒めたつもりなんですけど」

先輩はぼかんとした顔で、少し考えてたけど、結局よくわからなかったみたいで諦める。

「まあいいや、せっかくだから借りるね。ああでも、どうやって返したらいい？」

「あ」

そう言われてみると。

あんまり考えてなかった。

ので、急いで、考える。

するとあたしが考え付く前に先輩が、

「桜ヶ丘ってここからそんな遠くないよね。何なら返しに行こうか？」

思いがけない提案に、あたしは思いつきり首を横に振る。

「やっぱり、返さなくていいです。あげます」

「えっそれはさすがに悪いっていうか図々しくない？」

「いいです安物だし。わざわざ返しに来てもらう方が悪い気がします」

あたしが全力で拒否すると、先輩はわざとらしく視線を反らして大きくため息をつく。

「そうか、俺が返しに来るとウザい、とそういう事ね」

「何でそういう自虐的な方へ行くんですか。本当に気にしないでいいですってば」

正直、本当はちょっと、面倒かもって思っただけ。

だって先輩は知らないかもしれないけど、北高バスケット部の森屋孝史って言ったら、ウチの高校でもちよつと有名だ。周りの女子が無関心でいてくれるとは思えない。

「まあそれは冗談にしても、和奏ちゃんは今何しに来てんの？まさか補習とかじゃないよね？」

「部活です。管弦楽部」

「えっマジ？ 管弦楽ってオーケストラ？ すごくない？ っていうか、来週もあんの？」

「えーと、たぶん」

この辺の高校で管弦楽部があるのは比較的めずらしいけど、あたし個人は別に何もすぐなくて、今月は特に行事やコンクールの予定もないから、日曜日は自主練になっていた。

「よし、したらまた来週、今の時間にここで待ってるから」
「は？」

「わかりやすいよね。オツケー？ それとも都合悪い？」

「・・・悪くはないですけど」

「ちゃんと乾かして返すから。そういう事で。部活頑張って」

一人で勝手に話をまとめると、先輩はあたしの渡した折りたたみの傘を素早く開いて、そのまま手を振って去っていった。

何だかやつぱり、相変わらずよくわからない不思議な人だなんて思いながら、先輩の後ろ姿が小さくなっていくのをしばらくぼんや

りと眺めてた。その背中が、交差点を曲がって見えなくなると、あたしは手に持っていたビニール傘を広げて、まだ降り止まない雨の中を歩き出した。空はさっきよりほんの少し明るくなって、道端に咲く紫陽花が、雨の滴に揺れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7193e/>

Days - 気まぐれな通り雨

2010年10月8日15時49分発行